

今日の説教題は「損をする生き方」というものであります。「損をする生き方」、もし、こんなタイトルの講演会があれば誰も来ないのではないのでしょうか。まあ、見方によっては、「損をする生き方」という事で、実は「得をする生き方」というものが語られる場合もありますから、一概にそう断定する事は出来ないかも知れませんが、まあ一般的に言って「損をする生き方」なんていう題では人は集まらないと思うのでありますね。でも、これは説教題でありまして、講演の演題ではありませんので、ご理解いただければと思うのであります。

ということで、今日は「損をする生き方」ということについて考えてみたい訳ですけども、誰も損をするような生き方なんて望まないと思うのでありますね。私たちはよく「損得勘定」というようなことを言いますが、誰だって損なんかしたくない。特に、商売なんかしておられる方は、損をしたらやっていけない訳でありますから、損得勘定も厳しくなる。いろいろな駆け引きをしても、結局、最後には儲ける。これが商売人であります。素人は、見かけだけで判断してしまい損得が分からないということもありますけれども、商才のある人は、決して損はしません。最後には、必ずプラスが出るようにする。それは当たり前であります。損ばかりしていれば、会社はつぶれてしまうんですから、必ず儲けが出るようにする。それは当たり前。誰だって損なんかしたくないのであります。

確かに、私たちの社会はこのような損得勘定で動いているというようなところがあります。お互いに損をしないように。出来れば、お互い得をするようにうまくやって行こうとする。で、これは商売の世界だけではなくて、私たちの社会全般がそうではないかとも思うのでありますね。誰だって損はしたくないのであります。ですから、例えば、何らかの損害を受ければ、誰だってその賠償を求めることができる。法律は、その賠償を求めることを当然の権利として認めております。裁判所で行われる裁判は、人を裁くためだけではなくて、損害を受けた者の賠償を求める権利を認める機関でもあります。最近、人権問題という事がよく言われますが、この「人権」ということだって、平たく言えば、損をしないようにということではないのでしょうか。人間としての権利がそこなわれる、人間として正しく扱われないということは、人間として損をすることであります。まあ、言葉はあまり適切ではないかも知れませんが、人間が人間として損をしないために人権というものがある、そんなふうに言ってもいいのではないのでしょうか。

でも、今日の聖書の箇所を読む限りにおいては、「損をする生き方」というものが勧められている、そんなふうにも思うのであります。今日の聖書を見てみましょう。先ず、イエス様はこんなふうに言っておられます。「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。」「目には目を、歯には歯を」という教え、これは旧約聖書の出エジプト記(21:24)やレビ記(24:20)、申命記(19:21)などに出てくる思想であります。例えば、レビ記の24章17節以下には、こんな言葉があります。「人を打ち殺した者はだれであっても、必ず死刑に処せられる。家畜を打ち殺す者は、その償い(つぐない)をする。命には命をもって償う。人に傷害を加えた者は、それと同一の傷害を受けねばならない。骨折には骨折を、目には目を、歯には歯をもって人に与えたと同じ傷害を受

けねばならない」(ルカ 24:17-20)。このほかにも「手には手、足には足、やけどにはやけど、生傷には生傷、打ち傷には打ち傷」(出 21:24-25)という言葉も出て来るのですが、この「目には目、歯には歯」という教え、これは一般的には「復讐思想」なんて呼ばれます。目をつぶされたら、相手の目をつぶす。歯を折られたら、相手の歯を折る。やられたら、やり返す。「復讐思想」であります。しかし、この「復讐思想」、考え方によっては、復讐を制限する思想でもあると言われます。というのは、人間やられたら、倍にして、あるいは何十倍にしてもやり返すという、そういう気持ちが湧いて来るからであります。片目をつぶされたら、相手の両目をつぶさなければ気が済まない。歯を一本折られたら、二本、いやそれ以上折らないと気が済まない。三浦綾子さんの小説「塩狩峠」の中に、主人公の信夫を育てた祖母トセのこんな言葉が出てまいります。「信夫、男の子という者は、ひとつなぐられたら、ふたつなぐり返してやるのですよ。三つなぐられたら、六つなぐってやるものです。それでなければ男とは言えませんよ」。「殴られたら、殴り返す、しかも、倍にして」。人間というのは、そういうところがあるのではないのでしょうか。倍ならばまだしも、何十倍にしても仕返しをするという事だってある。人間の気持ちはエスカレートして行くのであります。そういう私たちの現実を考える時、「目には目を、歯には歯を」という思想は、エスカレートを抑止するものになるとも言われるのであります。要するに、『目には目を、歯には歯を』というのは、片目をやられたら、相手の片目だけにしておきなさい。歯を一本折られたら、相手の歯も一本だけにしておきなさいという、そういう復讐を制限する思想でもあるというのであります。確かに、そんなふうに理解した方が本当の所なのかも知れません。

でも、イエス様は、こんなふうに教えるのでありますね。

「しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。だれかが、一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい。求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない」
こんなふうに教える。

これは、ある意味において、「損をする生き方」であります。まあ、最初の「悪人に手向かってはならない」というのは、「手向かっても仕方ない、いいことはないからやめておけ」という、そういう意味にも取れますが、次の「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」という言葉から始まる教えは、決して「得をする生き方」ではありません。「右の頬を打たれたら、左の頬をも向けてやれ」、普通はとんでもないということになる訳であります。ぶたれたら痛い訳ですから、次は避けようとする。降りかかる火の粉は払わなければならない。そんなふうに私たちは考える訳であります。しかし、イエス様は「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」と教える。決して「得な生き方」ではない、むしろ「損をする生き方」であります。

次もそうであります。次は「あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい」とあります。当時の人たちは、下着は何枚か持っていたようですが、上着は1枚しか持っていない、そういう人たちが多かったようであります。しかも、この上着は、昼は外套となり、夜は毛布代わりになる貴重品。そういう貴重品である上着にもかかわらず、イエス様は「下着をよこせ」という者には上着をもくれてやれと教える。これは大変な事である訳であります。損の上塗りどころではない。下手をすると生死に関わるような事にもなりかねない、本当に損をする生き方であります。

また、続いてこんな言葉も語られます。「だれかが、一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい」。1ミリオンというのは、聖書の後ろの「換算表」によれば約1,480 m、およそ1.5kmであります。1.5km 行けと言われたら、その人と一緒に3 km 行けという訳であります。昔、イエス様時代には、もう郵便制度のようなものが整っていたようで、要所要所に駅舎があり、人と馬が備えられ、敏速正確に郵便物が届けられたそうでもあります。ところが、何かトラブルがあって、然るべき人数や馬に欠けが生じますと、緊急の郵便を届けるために、急遽、馬や人がかり出されたそうなんです。日本でも、戦争中、お国のためだからという事で、男の人は兵隊にかり出されましたし、女の人は、軍需工場などで働かされました。そのほか多くの物が「お国のため」ということで徴用されました。それは国家権力による強制でありました。イエス様当時も同じようなことが行われたようでもあります。国家権力によって「強いられる」。それは、ある意味において、屈辱であります。自由を奪われ、人間性が踏みにじられる出来事であります。徴用され、1ミリオン行けと言われれば、行きたくなくても行かざるを得ない。しかし、イエス様はあえて、1ミリオン行けと言われたら、その人と一緒に2ミリオン行けと、こう教える。強制させられるだけでもいやなのに、余分に倍も行く。損な生き方であります。

そして、最後ですが、最後にはこんな言葉があります。「求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない」。

「求めるものには与えよ。借りようとする者を拒んではならない」。こんな生き方をしていたら、いくら財産があっても間に合いません。要するに、これらのイエス様の教えは「損をする生き方」を教えている、そう言ってもいいと思うのであります。「損をする生き方」。誰もこんな生き方は望んでいない。この世では通用しないような、そんな生き方。

それでは、イエス様は、どうしてこんな「損をするような生き方」を教えるのでしょうか。ある人は、神の国とはこういうものだ、ということイエス様は教えておられるのではないかと。また、「愛というものはこういうものだということをお教えしようとしておられるのではないかと」言います。自分が損をして、相手が得をするような、そういう自己犠牲の愛。そういう自己犠牲の愛によって神の国は成り立っている。聖書は、そういう愛を教えておりますね。イエス様の十字架がその典型であります。イエス様は、私たちが得をするために、ご自分は損をする道を選ばれ、十字架につけられ殺された訳であります。自分も損をしても、相手が得をすれば、それをよしとする、そういう世界もあるのであります。それが「神の国」であります。勿論、自分は損をしても、相手が得をすれば、それをよしとするというような生き方、それは誰にでも出来ることではありません。でも、そういう生き方も確かにある。

これも三浦綾子さんの小説の中に出てくる会話ですが、「氷点」の中で、辰子と徹と陽子の、こんな会話があります。

辰子：「もし百円落としたら徹くんはどう思う？」

徹：「損したと思うさ。当たり前さ」

辰子：「陽子は、どう思う？」

陽子：「百円落とさないで、わかんないけれど、ずっと前に十円おとしたの」

辰子：「その時どう思った？」

陽子：「だれかが拾って喜ぶだろうと思ったわ」

辰子：「だれかが拾って喜んだら、つまらない？」

陽子：「だれかが喜んだらうれしいわ。乞食が拾えばいいなあと思ったの」

徹：「だってさ。落としたら損だぞ。うれしくないよ、ぼくは」

辰子：「徹くん。十円落としたら、本当に十円をなくしたのだから損したわけよ。
その上、損した損したと思ったら、なお損じゃない」

徹：「あ、そうか」

辰子：「百円落としたら百円分楽しくするのよ。二百円落とさずに百円だったからよかったなと思ってもいいしね。あの百円拾った人は、もう死ぬほどおなががすいていて、あの百円のおかげで命が助かって、それからだんだんいいことばかりあるんだと思っていいわ。百円落とした上に、損したといつまでもクヨクヨしていたら大損よ」

徹：「フーン。足をケガしたら、手はケガをしなくてよかったと思うのかい？」

辰子：「そうよ」

どうでしょうか、面白い会話ではないでしょうか。お金を落として損をしたと思う人もいれば、そのお金を拾って得をする者がいるかも知れないから、それはそれでいいとする、そういう考え方もある。面白いとは思いませんか。

でも、イエス様は、そういう事だけを教えているのでしょうか。ある人は、こんなことを言います。イエス様は「キリスト者の自由」ということを教えているのではないか。『目には目を、歯には歯を』という、やられたらやり返すという、この世の常識に対して、悪人には手向かわないという自由、右の頬を打たれたら、左の頬をも向けていくという自由、また、下着を取ろうとする者には、上着をも与えるという自由、あるいは、強制的に一ミリオン行くように言われたら、進んで二ミリオン行く自由、また、求められたら与えるという自由、そういう自由をキリスト者は持っている。そして、イエス様はそういう自由を大切にしてくださいと教えているのではないかと、そんなふうにする人もおります。確かに、そういうことも言えると思います。強制的に「しろ！」と言われれば、誰だって嫌ですけども、自分から進んでそうすれば、それは必ずしも嫌ではない。自分の自由意志で物事をなしていくとき、人間性は保たれる、そんなふうにしてもいいかも知れません。

でも、もう一つ考えてみたい事があります。それは、もしこのような教えがなければ、私たちはたぶん「右の頬を打たれたら、左の頬をも向けていく」というようなことは絶対しないだろうということであります。勿論、例外はあるかも知れません。でも、このような教えがなければ、私たちは多分安易な道の方を選び、このような「損をする生き方」なんか絶対しないのではないかと、思うのであります。勿論、このように教えられているからといって、私たちにこのような事が出来るという保証はどこにもありません。たぶん、このような教えがあっても、私たちに出来ないことの方が多いのではないのでしょうか。でも、問題は、出来るとか出来ないという、そういうことではないのであります。このような教えがある。イエス様は、こんなことを教えられたという、そのことが問題なんであります。

繰り返しますけれども、もしこのような教えがなければ、私たちはたぶん自分に都合のいい、得をするような生き方「だけ」を選ぼうとするのではないのでしょうか。でも、そういう時、私たちの背後で、こういう「損をする生き方もあるよ」と語りかけるイエス様の声が聞こえてきたらどうでしょうか。私たちは立ち止まり、もう一度自分の考え、自分の判断・決断を見直すこともまた出来るのではないでしょうか。

私は、このようなイエス様の教えがあるということを、とてもありがたく思います。常識に流されやすい私たち、安易な道を選んでしまいがちな私たちに対して、もう一度、信仰者としての歩みを思い出させてくれる、とてもありがたい言葉のように思える訳であり

ます。勿論、言葉だけで終わってはいけない訳ですが、でも、これらの教えを知っているだけでも、私たちの人生、だいぶ違ったものになるのではないのでしょうか。「損をすることを誰かが引き受けなければ、世の中は成り立っていかない」と誰かが言っておられましたけれども、心に残る言葉であります。

さて、今日は「損をする生き方」ということでお話をさせていただきました。最初に、こんなタイトルでは人は集まらないのではないかとということを申し上げました。確かにそうかも知れません。でも、これはイエス様の教えなんでありませぬ。そして、イエス様は、「わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている」とも言うておられます。(マタイ 7:24) この世的には「損をする生き方」かも知れませぬけれども、イエス様の国(神の国)では、これは「賢い人の生き方」、そして「得をする生き方」なのであります。なぜならば、イエス様の言葉を行う者だけが「天の国・神の国」に入れる訳ですし、神様の祝福にあずかることができるからであります。イエス様は、こうも言うておられます。「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国(神の国)に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。」(7:21)。イエス様の言葉、神様の御心を行うというのは、口で言うほど、そう簡単なことではありません。でも、それは神の国に入る「賢い人の道」であり、祝福にあずかる道でもあるということ、私たちは是非覚えたいものであります。

今日、最初に、「損をする生き方」という事で、実は「得をする生き方」が語られる場合もある」と申し上げましたけれども、今日のお話は、単に「損をする生き方」というお話ではなくて、本当の意味で「私たちが得をする生き方」をお話したつもりであります。確かに、イエス様の教えは、この世的には「損をするような生き方」かも知れませぬ。でも、本当の意味では、それは「得をする生き方」なのでありますね。天の国(神の国)に入れてもらえる道であり、神様の祝福を豊かにいただける道だからです。お祈りします。